

K-557

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第63集

上谷地 D 遺跡

発掘調査報告書

1 9 9 9

米沢市教育委員会

上谷地 D 遺跡

発掘調査報告書

平成 11 年 3 月

米沢市教育委員会

序 文

本書は民間の宅地造成に係わる受託事業として、米沢市教育委員会が実施した上谷地D遺跡発掘調査の報告書です。

上谷地D遺跡は本市の北東部に位置する上郷地区にあります。この地区は栗子山を源とする梓川扇状地の平坦部に位置しており、近年、学校建設や工場用地造成等に伴う発掘調査が数多く実施されています。これら一連の調査によって、貴重な資料が確認されています。

今回の調査区からは遺構、遺物とも出土数は多くありませんでしたが、土偶頭部の出土もあり、本市の原始古代史において新たな一頁を加えたものと考えております。

また、当地区には戸塚山古墳群、長手古墳群を中心とする遺跡群もあり、県内でも遺跡が密集する地域としてよく知られています。

これらの埋蔵文化財を大切に保護し、郷土の歴史として後世に伝えていくのが我々の責務だと思います。本市といたしましても、開発事業と埋蔵文化財の保護との円滑な調整を図りながら、かけがえのない先人の足跡を後世に伝えるため、なお一層の努力をいたす所存ですので、さらなるご支援、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が、今後の教育活動において、活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査にあたりご協力をいただきました㈱太田建設、文化庁、山形県教育庁文化財課、地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成11年3月

米沢市教育委員会

教育長 相 田 實

例　　言

1. 本報告書は宅地造成に伴う緊急発掘調査として、米沢市教育委員会が実施した上谷地D遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は米沢市教育委員会が主体となって、民間会社との受託事業として実施したものであり、期間は平成9年9月20日～同年10月8日まで延べ15日間であった。

3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 船山豊弘（文化課長）

調査担当 手塚 孝（文化課文化財係主任）

調査主任 菊地政信（文化課文化財係主任）

調査参加者 松本三郎 渡辺和三 新田引二 黒沢富雄 高橋信子 近野慶子 下村英子
高橋洋三 小関秀美子 今泉憲子 佐藤高義 西野勇二 武田房二郎
佐藤四郎 中村昭夫

事務局 小林伸一（文化課補佐）

山本 卯（文化課文化財係長）

平間洋子（文化課文化財係主査）

調査指導 文化庁 山形県教育庁文化財課

調査協力 太田建設（株）

4. 掃図縮尺は各図にスケールで示した。遺構平面図の方位記号は真北に統一した。写真図版もスケールで示した。

5. 本報告書で使用した遺構・遺物の分類記号及び、遺物等の図化は「米沢市埋蔵文化財報告書第15号」に沿っている。

6. 遺物の出土点については挿図で示した。

7. 遺構等の土層については「新版標準土色表」（小山、竹原1973）

8. 本報告書の作成は菊地政信が担当した。全体的に手塚 孝が総括した。責任構成は山本卯がこの責務にあたった。トレースについては、長澤由紀が補助した。

本文目次

序文	
例言	
1 遺跡の概要	1
2 調査の経過	1
3 検出遺構	3
4 出土遺物	5
土器	5
石器	6
5 まとめ	12
参考文献	13
報告書抄録	14

挿図目次

第1図遺跡位置図	2
第2図上谷地D遺跡遺構全体図	4
第3図上谷地D遺跡遺構平面図	7
第4図上谷地D遺跡出土土器拓影図（1）	8
第5図上谷地D遺跡出土土器拓影図（2）	9
第6図上谷地D遺跡出土土器拓影図（3）	10
第7図上谷地D遺跡出土土器拓影図（4）	11

図 版 目 次

巻頭図版

調査区全影（南方から）

土偶出土状況（東南から）

図版1 表土剥離風景 調査風景

図版2 調査風景

図版3 土壌セクション状況

図版4 プラン確認状況 遺物出土状況

図版5 出土土器（前期）

図版6 出土土器（前期・後期）

図版7 出土遺物（石器・土偶）



▲調査区全景（南方から）



▲土偶出土状況（東南から）

1 遺跡の概要

本遺跡は米沢市大字川井字上谷地に所在する。標高は250m前後あり、周辺は宅地・畑・原野が広がる地域であったが、学校建設や道路並びに工業団地造成等が進み、急速に変貌しつつある。

地形的にみれば当市の東南東に位置する栗子山から源を発する梓川の扇状地末端部にある。この河川の上流は笊層と呼ばれるやわらかい岩石である。この岩石を浸食した土砂が堆積して形成された一帯が八幡原周辺地域であり、旧河道に沿って遺跡が分布している。

これは、発掘調査の成果である。調査は八幡原一帯を工業団地として造成することから実施されたものであり、本市にとっては最初の大規模な発掘調査であった。その後も、住宅団地に伴う調査も行われ、上谷地地区では米沢工業高等学校の新築に伴なった調査を実施している。第1図に示した遺跡No.A603の地域である。

遺跡No.A603は上谷地C遺跡と呼ばれる地域であり、発見順に番号を付けたことから南方の上谷地a遺跡、北方の上谷地B遺跡、そして今回の上谷地D遺跡が所在する。各位置の詳細については挿図を参照願いたい。

また、上谷地B遺跡に中には、土壘と水掘が現存する上谷地館（安倍館）もあり、遺跡No.A567の地点である。1994（平成6年）には上谷地Dの試掘調査を実施し、中世の溝状遺構等を中心とした中世の遺構群を確認している。

この様に、本遺跡の周辺は各遺跡群が密集する地域である。これは前述したように、地形状の理由、すなわち扇状地の末端部、中世における館の立地条件等がその要因として上げられる。

2 調査の経過

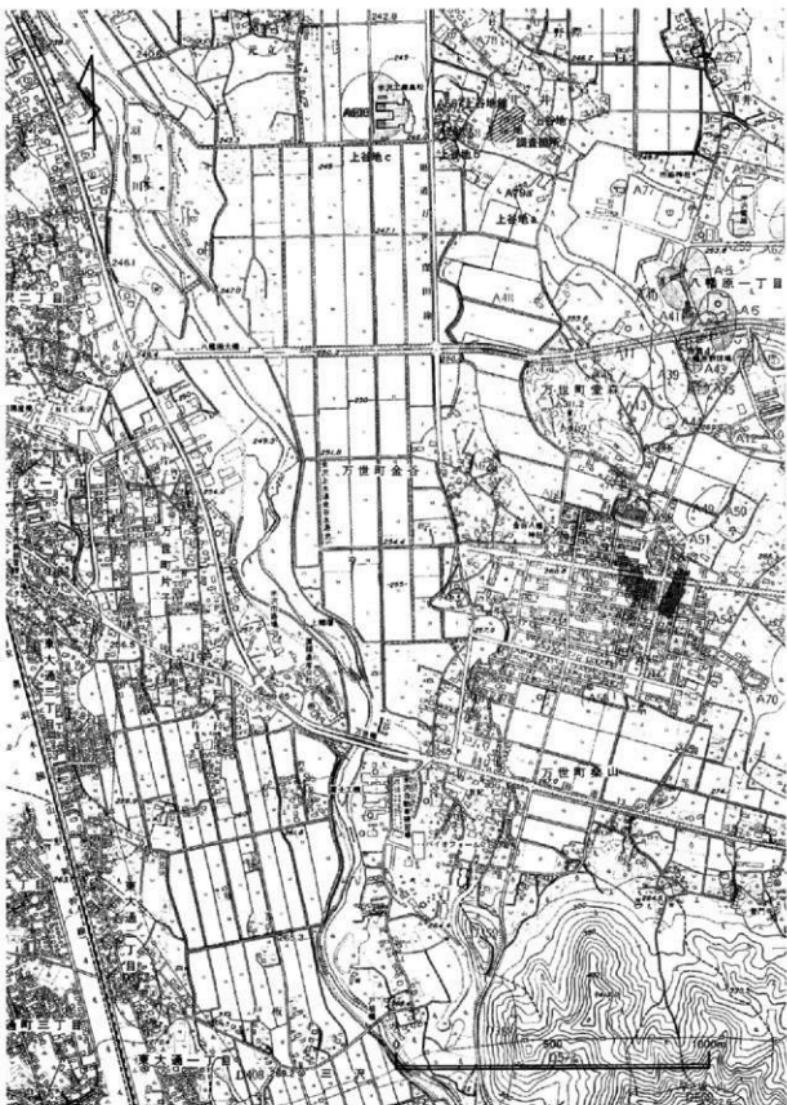
広範囲に及ぶ開発予定地であることから、試掘調査から開始した。その結果、開発予定地を流れる小川に沿って、遺物が分布することが判明した。そのため、小川を中心に調査区を設定した。南方から北方に1区から7区を配し、調査を開始した。

表土剥離は重機を利用し、2日間を要した。現況は原野であり、北西部が湿地を有する地形であることから、有機物の遺物が出土する期待もあった。しかしながら、今回の湿地帯は無遺物層で、遺物は認められなかった。

遺物が集中するのは1区・2区の南部であることから、この2箇所を中心に掘り下げを実施した。その結果、新しいと推測される土壤群が確認された。表土から掘り下げており、また上部面に木材が混入する状況を呈していた。

吟味の結果、これらの土壤群は立木を伐採した後に重機で穴を掘り伐採した立木を埋めたものであった。この土壤群から、今回の調査区は立木が生い茂る地域であったことが伺えるものである。また予想以上に、削平されていることが判明した。

調査区は疊や砂利を含まないシルト層で、掘り下げる調査は順調に進行し、10月8日までに予定範囲の調査を終了するに至った。今回の調査面積は約500m²、調査期間は平成9年9月24日から同年10月8日の延べ15日間であった。



第1図 上谷地D遺跡位置図

3 検出遺構

今回の調査区からは、溝状遺構2基、土壙7基の総計9基の遺構群が確認されている。調査区を流れる小川は、重機によって近年掘られたと考えられる。確認した面の削平が著しく、底面に近い形態であり、遺物も散乱した状況を呈していた。溝状遺構、土壙の順で説明したい。

K Y 1・2の遺構である。両者とも浅いのが特徴である。並列して南北に延びる形状で最大幅82cm、最小55cmで平均は70cm前後の幅を有する。K Y 1は1区の南側で西南に曲する形態で、底面からは少土器片、剥片が出土している。出土土器はⅡ群土器に分類した縄文後期の土器片であった。覆土の土色は黒褐色に黄褐色の微砂質土が若干混入する堆積状況でやわらかい。炭化物は認められなかった。

K Y 2は2区の調査区で終わる。幅はK Y 1と同様で、覆土も類似する。第2図で示すように1区南端部で溝状遺構の底面から土偶の頭部片が出土している。頭部が突きだした形態のハート型土偶と考えられる。なお今回の調査区からは、この溝状遺構から出土したのは1点のみであった。

從来土偶は、こわして埋納する説があり、今回の出土例からもそのことが伺える。溝状遺構の上面から土壙を示すようなプランは確認されなかったことから、溝状遺構が機能していた時期に廃棄され、そのままに自然に埋没したものと理解したい。

出土状況は顔を上面に、頭部は西方を向いていた。年代としては、ハート型土偶に分類されるもので、縄文後期と推測する。

D Y 1は4区の北西部にある。南北に長径70cm、東西の幅は40cmを測る。深さは50cmを有し、底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は3枚認められ暗黒褐色微砂質土を基準に、少量の砂を含む層と炭化物を含む層に分けられる。

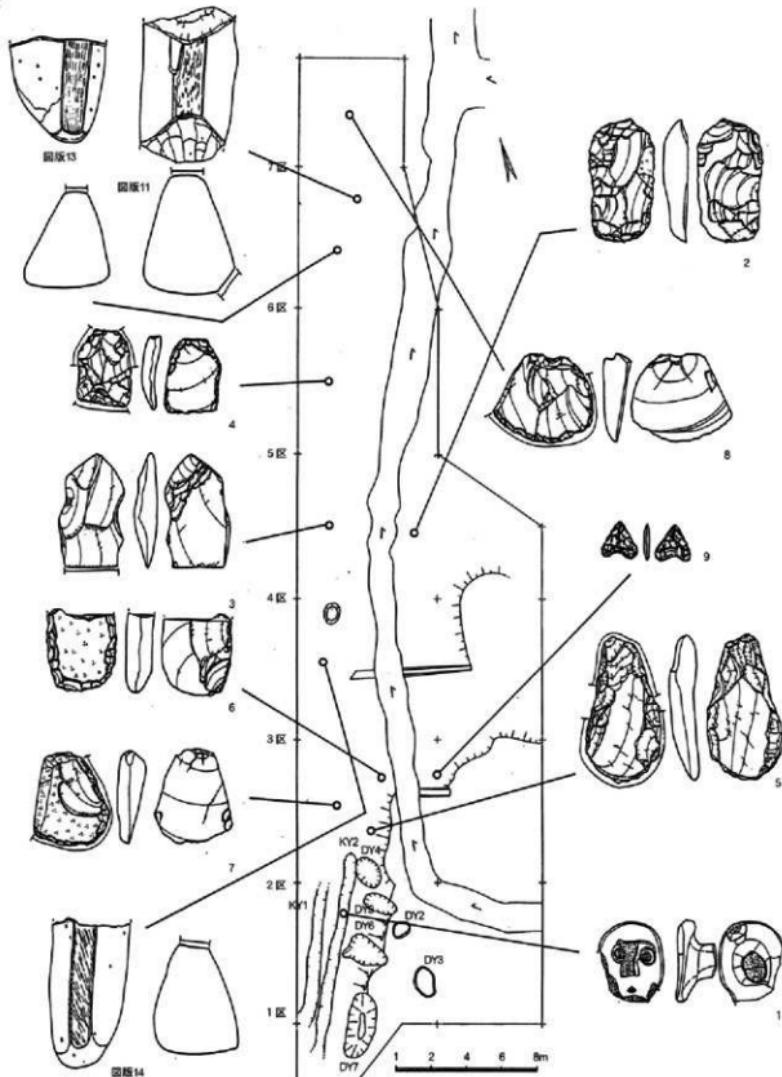
出土遺物の大半は剥片で占められる。遺物の中に年代を示す土器群は認められなかったが土壙が構築された箇所の南東部はⅠ群土器の大半が出土した場所にあたる。土器片との関連からすれば縄文前期の遺構と推測される。

D Y 2～D Y 6は、1区・2区に集中する。この地域は東から西へ傾斜する地形であり、微高地の上場にD Y 3、斜面部にD Y 2、下場付近にD Y 4～D Y 7が分布している。土壙の最深はD Y 7の40cmであるが、前述したように、本地域が削平された状況であることから、本来はもっと深い形狀を示していたものと推測する。

D Y 7を除く他は遺物は認められなかった。また、D Y 2・3に関しては覆土が黄褐色を呈する地山の土で占められ、人工堆積状況であることから近・現代の土壙と考えられる。しかしながら墳墓的要素は認められず、構築目的は不明と言わざるを得ない。

下場に位置する南北に配置された土壙群も、覆土や出土遺物からは構築目的を示す資料は得られなかった。覆土の固さや土色から判断して、縄文時代の可能性が高い。

以上、遺構群について述べた。調査区の北方には遺構は認められなかった。第1図で示すように2区・3区の小川を境とした東方には、落ちこみは確認されたが掘り下げの結果、遺構ではなく、自然地形の斜面箇所であったので「ケバ」で示した。



第2図 上谷地D遺跡遺構全体図

4 出土遺物

今回の調査区からは1区から3区の遺構と包含層を中心に総数で158点が出土している。年代別では縄文時代が128点、近世30点となる。後者の近世については割愛した。縄文時代について述べたい。

大別すると土器95点・石器8点・剥片40点・礫石器5点となる。土器類の中には土偶の頭部片1点を含む。列挙した順に説明したい。

・土偶 [第7図1]

KY2の底面から出土したもので、現存する大きさは長径5cm、幅4cm、厚さは2.5cmを測る土偶頭部片である。出土状況については遺構で述べた。1bで示すように顔面の裏側には凸状の取付部が整形され胴部と接合する形態とみられる。

赤褐色を有する色調で焼成は良好であることから、意図的に胴部から除外しないと頭部だけ残る事は考えられない。顔面には突刺による目と口を表現し、粘土隆線によって鼻とまゆげを整形している。アゴと鼻が欠損しているが、全体の形状は把握できる。1C部分には2箇所に接合面があり、髪を現わすブリッヂ状を有していたものとみられる。II群土器に併行する土偶であろう。

・土器 [第4~6図]

95点出土しているが、拓影図が可能な75点について挿図を作成した。また口縁部形態が復元可能な1について復元図を作図した。なお図面番号と、拓本の番号は同一である。出土した土器群は文様表出技法や胎土から細分が可能であった。以下に細類を加え述べたい。

I群a類土器 [第4図2・3]

大木2式併行の土器群であり、包含層から2点出土している。色調は暗黒褐色をなし、胎土に若干の纖維を含む特徴が認められる。器面は厚く、焼成は良好である。胴部上半部の破片があり、「S」字状連結文を施文した土器片である。

I群b類土器 [第4図1]

唯一、口縁部を復元した土器で有り、口縁径は20cmを測ると推定される。外反する器形と推測され、ボタン状の貼付文に平行や二重の「U」字形状文の沈線文さらに円形の突刺文で文様を構成する口縁部破片であり、6点検出されている。まとまって包含層から出土している。文様の表出技法から大木3式併行、もしくは大木4式併行と考えたい。

I群c類土器 [第4図5・6・7]

ゆるやかな波状をなす口縁部片で、口唇部を中心に3条の突刺文を施文する文様構成である。胎土にやや大きめの石英砂を混入した胎土で纖維が若干認められる。口唇部以外は斜状文を施文する。前述したI群b類と同様な層位出土であることから、同様な時期と考えられる。

I群d類土器 [第4図8~13 15~19]

胴部片で器面全体に縄文を施文する。3区2層の包含層からの出土が大半で、前述したa類~c類の胴部破片とも考えられるものもある。いづれも厚みのある器形で、石英砂や纖維を若干含む。17は底部破片であり、網代痕が観察される。本類も大木3・4式併行と考えたい。

I群e類土器 [第4図14、第5図20~27]

胎土の色調が暗赤褐色をなし、石英砂を多く含む胎土の土器群である。無文が大半を占めるが24の様に縄文を施した例も認められた。本類も厚みのある器形で、焼成は良好である。本類土器の最大の特徴は胎土に赤色の鉱物を含むもので、d類の一部にも認められる。大きさは3cm位で斑点状にボツボツと赤色箇所が認められる。意識的に土器に混入したものか、偶然なのかは判断できないが比較的の前期末の土器に類似がある。

土器の年代としては本群土器の出土状況には層位差は認められないことや、纖維を含む点で共通点が認められることから、大木3・4式併行土器と推測される。

II群a類 [第5図28~39、第6図65~75]

胎土がもろく、一見して縄文後期の土器群をII群とした。II群a類は、無文・縄文を有する土器群をまとめた。I群と比較すると器面はうすいのが特徴である。54・55は口縁部片で54は無文の形態、口唇部は凸状をなし、器形は小形の鉢形土器と推測される。36~38の3点は深鉢形土器の底部片である。後述するII群b類の加曾利B I・B II式併行するものと考えられる。

II群b類 [第6図40~64]

平行沈線を主体的に配する文様構成で、縄文後期の加曾利B I・B II式に併行する土器群と考えられる。器形は外反する深鉢形、50・53のように小形の器形も認められる。53は壺形をなすものと考えられる。いづれも薄形の土器片であり、胎土に纖維を含まない。文様が判別できる土器から吟味して加曾利B I式が中心と推測する。

・石器

石材としては、頁岩・チャート・玉隕を使用している。石材の色も、赤・白・黒とバラエティに富んだ石材を使用して、石器を製作している。完成石器は8点と少ないが、形態別に述べると石鎌1点、打製石斧1点、石箆状石器5点、削器類1点となる。列挙した順に説明したい。

・石鎌 [第7図9]

ハジケ面をなし、基部がゆるやかな湾曲を有する形態である。3区の東方II層面から出土している。断面形態でも理解されるように、完成し、使用した石鎌と推測する。

・打製石斧 [第7図9]

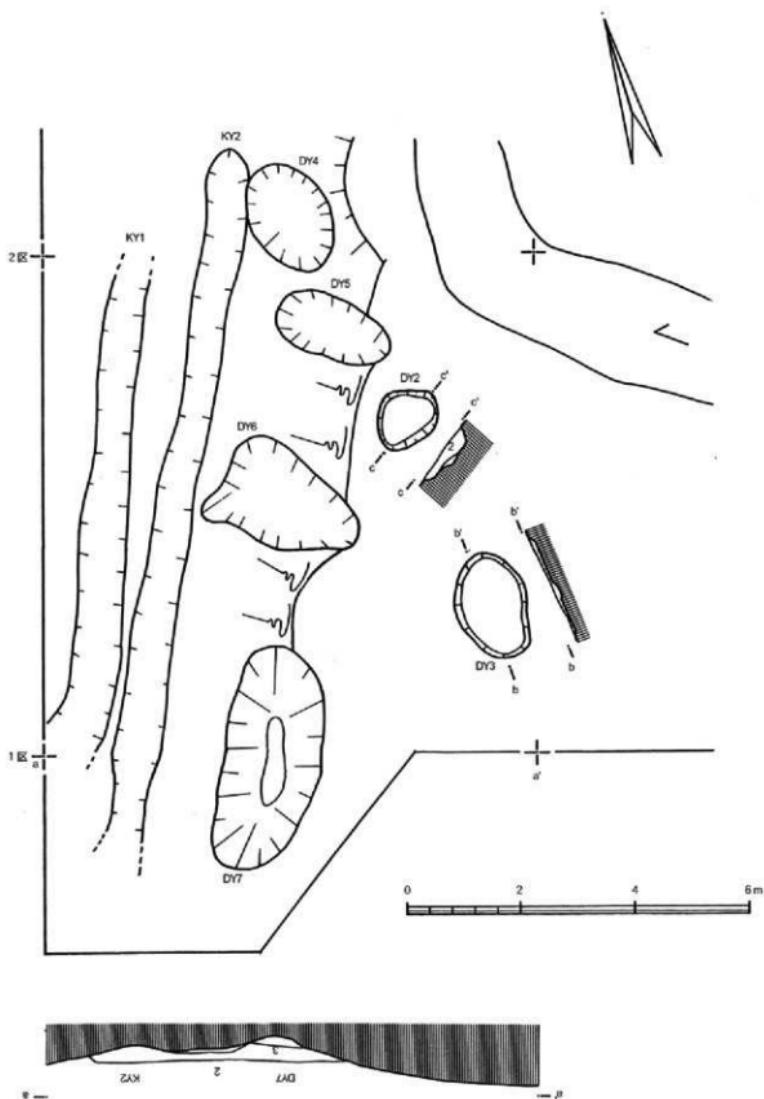
泥岩製の岩石を素材とし、打製によって丸味をなす刃部と平坦基部を整形している。刃部及び基部に使用痕が観察されることから柄着装痕と理解したい。3区包含層から1点出土。

・石箆状石器 [第7図2~4・6・7]

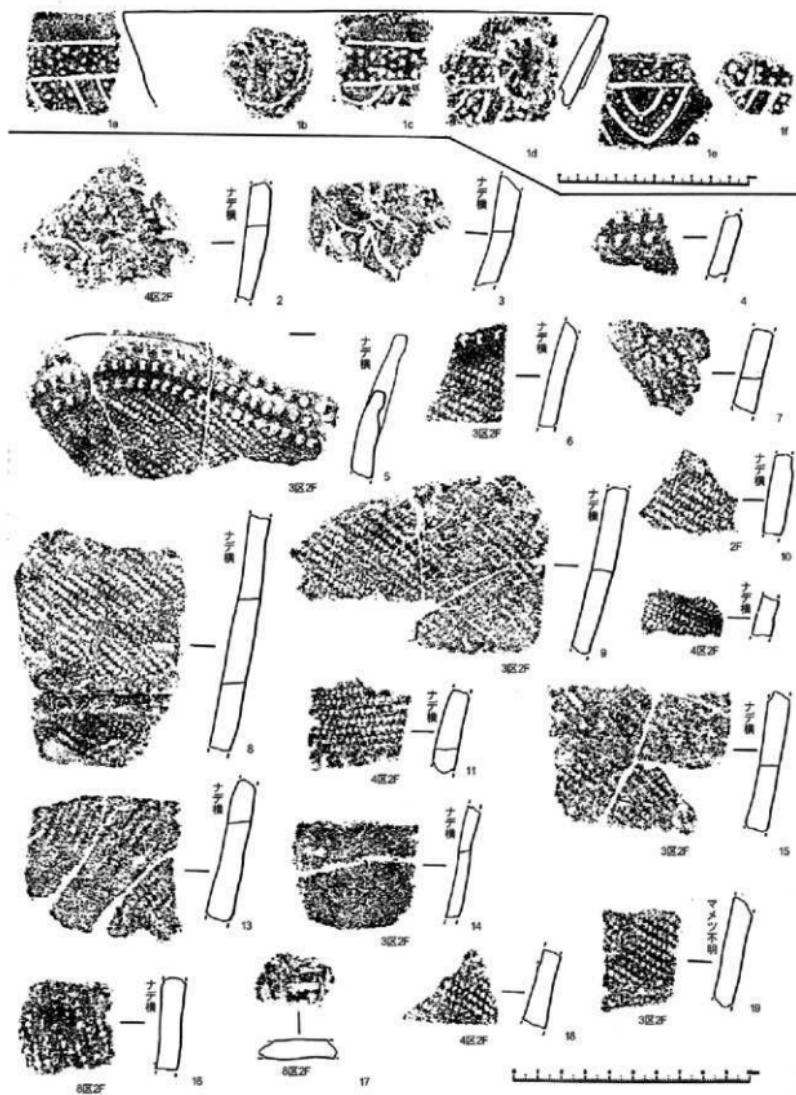
最も多い形態であり5点出土している。出土点については第2図に示したので参照願いたい。3・4・7の刃部に使用痕が観察される。2は刃部形態から判断し刃部再調整の失敗品と推測する。4は小形の形態をなし、基部の両縁辺には柄着装痕が認められなかった。

・削器 [第7図8]

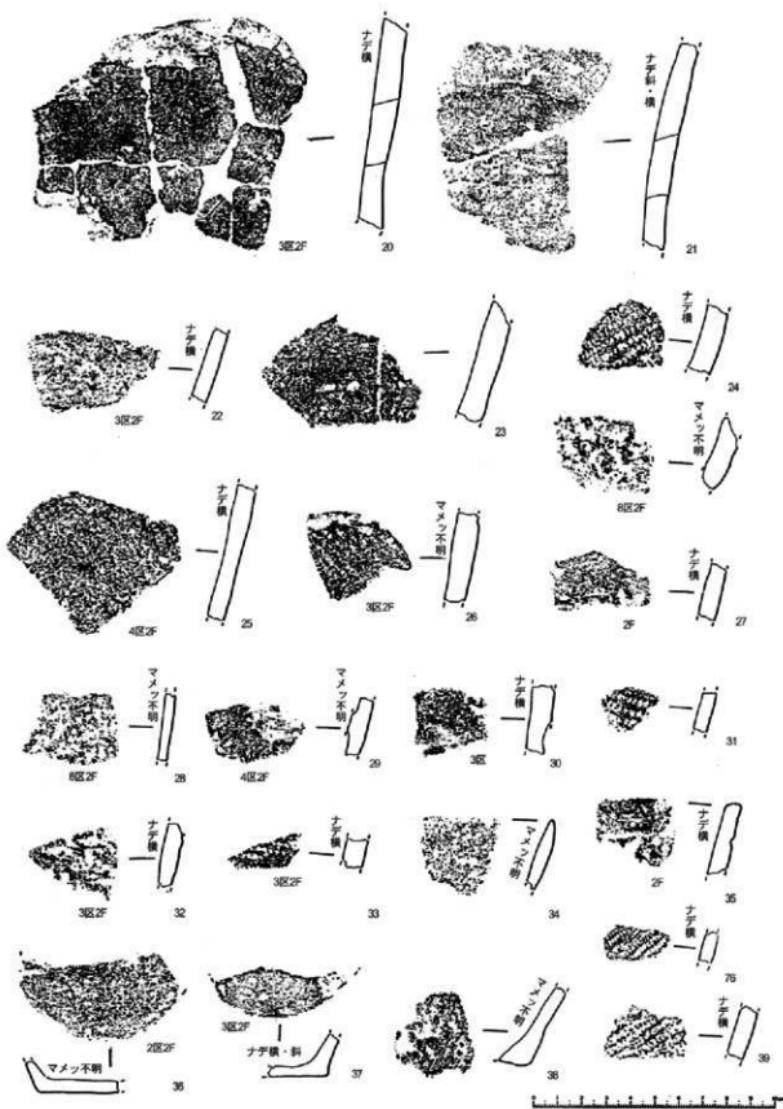
剥片の素材形態をあまり変えないで、縁辺を中心に調整した削器であり使用痕、C面には磨滅痕が明瞭に観察される。



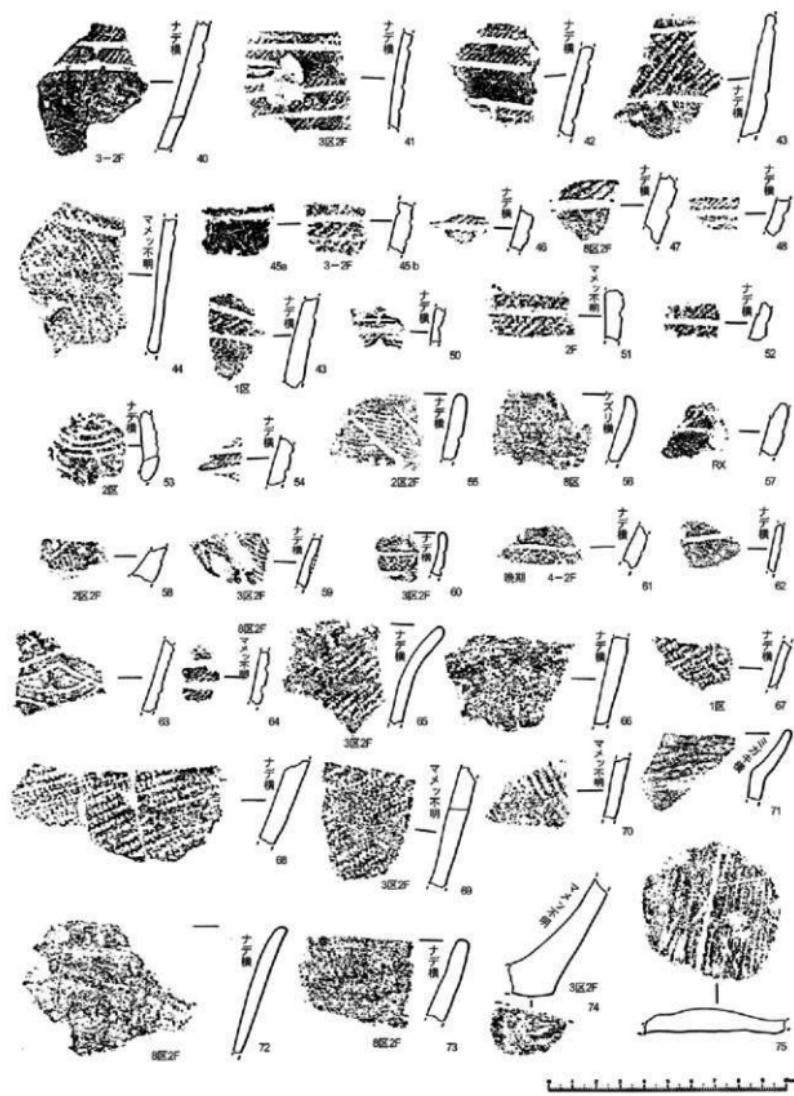
第3図 上谷地D遺跡遺構平面図



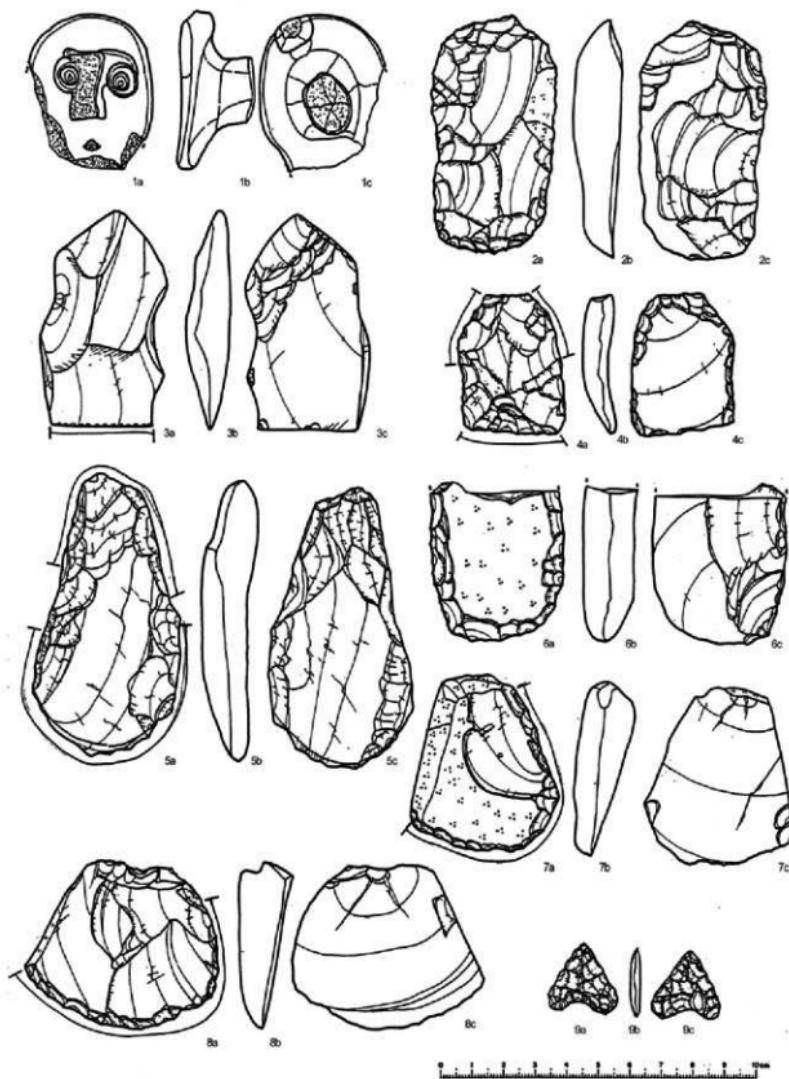
第4図 上谷地D遺跡出土土器拓影図(1)



第5図 上谷地D遺跡出土土器拓影図（2）



第6図 上谷地D遺跡出土土器拓影図(3)



第7図 上谷地D遺跡出土遺物実測図

礫石器 [第2図版11・13・14]

石英粗面岩、安山岩、緑色班岩を使用した礫石器であり、出土した遺物はすべて、縁辺に磨面がある形態であった。欠損面を有するもので占められ、意図的に割られた状況を示す。

5まとめ

・遺構

住居跡や貯蔵穴は確認されなかった。遺跡の位置づけとしては集落跡の一部であるところの散布地的な箇所とみられる。注目されるのは、KY2とした遺構である。土偶が出土した場所であり、重要な位置を占していたものと理解したい。

・遺物

縄文前期の土器群が上げられる。胎土に纖維を含む良好な焼成であった。破片で占めることから器形は明確にできなかったが出土例が少ない大木2・大木3・大木4式に併行するものと考えられ、今後の縄文前期初頭における土器編年に新たな一頁を加えたことになる。特に第4図の1a～1fの一括土器はボタン状の貼付を示すもので、ボタン状の貼付文が盛行する大木6式の前段階に位置づけたい。

縄文後期の遺物としては土偶がある。出土した土器群から縄文後期中葉の土偶と考えられるものである。後期の土器群はいずれも焼成が悪い状態である。遺物から判断すると、縄文前期と後期の遺跡であることが明らかになったが、なぜ発見例の多い縄文中期の土器片が、一点も出土しないのか興味のあるところである。

全般に亘って述べると次の様なことが言える。まず始めに、今回調査した場所・地域についてである。当市を代表する八幡原遺跡群の北西部に位置し、旧梓川が羽黒川にかけて合流した時期があったことは明らかである。この事実は周辺の遺跡である上谷地a, B, Cの各遺跡の発掘調査や試掘調査によって明らかにされてきた。

上谷地D遺跡では、湿地地帯の暗渠工事の際に掘り出た泥炭層から、丸木弓や多量の土器が出土しており注目される地域である。また上谷地C遺跡からは県立米沢工業高等学校の建設に伴う発掘調査が実施され、奈良・平安・中世に亘る集落跡が確認されている。

遺跡の年代・立地の分布状況から判断すれば、今回の調査区域周辺を北流する河川が存在した時期を縄文前期前後に想定される。その後、旧河川道は沼状をなし、やがて湿地へと変容していくたとえる。湿地に変容したのは縄文後期から晩期であり、合流していた羽黒川もしだいに西方に流れを変えたと推測され、奈良・平安時代には、上谷地Cの所在する地域も人々が居住可能な地形になったと考える。

その後、城館跡が集中的に成立する場所もある。それ以前の、弥生時代から開始される米作りが要因であり、今回調査した周辺は米作りに適した土地であったものと考える。

今もその名残りのある空掘・土壘・山城が現存するのは繰り返し、土地利用されてきた中で生活した証であり、今後も発展と、文化財が共存する地域として期待したい。

参 考 文 献

- 1975 手塚 孝 他 米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内
埋蔵文化財調査報告書 第1集～第3集・米沢市教育委員会
- 1983 手塚 孝 他 米沢市万世町桑山団地造成地内
埋蔵文化財調査報告書 第I集～第III集・米沢市教育委員会
- 1988 手塚 孝 他 比丘尼平 米沢市埋蔵文化財報告書
米沢市教育委員会
- 1995 菊地政信 他 遺跡詳細分布調査報告書
米沢市埋蔵文化財報告書第47集 第8節 上谷地B遺跡
米沢市教育委員会

報告書妙録

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	かみやちいせき 上谷地遺跡						
書名	副書名	上谷地D遺跡発掘調査報告書						
卷次	シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	編著者名	第63集 菊地政信						
編集機関	所在	米沢市教育委員会 〒992-0012 山形県米沢市金池二丁目1-55 Tel0238-22-5111						
発行年月日	ふりがな 所収遺跡名	西暦 1999年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	6202	米沢市 遺跡番号 A-656	37度 54分 56秒	140度 9分 41秒	19970924～ 19971008	500	宅地造成に 伴う
かみやち 上谷地	中北がたけん上ねぎわし 山形県米沢市 おねあざわいはい 大字川井 かみやち 上谷地3876-1 ごう 号							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上谷地 D遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器	特になし			

写 真 図 版



表土剥離風景（北方から）



表土剥離風景（北東から）



表土剥離風景（東方から）



面整理作業風景



表土剥離風景（北東から）



1区表土剥離（北西から）



面整理風景（北西から）



精査風景（南方から）

図版2



2・3区調査風景（東方から）



2区東方掘り下げ風景（西南から）



II層面掘り下げ風景（西南から）



2区東方掘り下げ風景（南方から）



2区斜面調査風景（南方から）



2区東方調査風景（南方から）



1区調査風景（南方から）



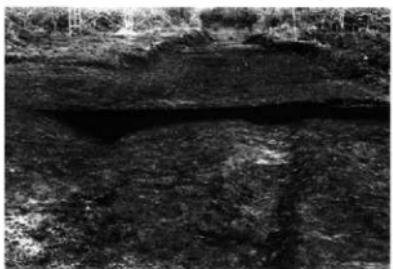
3区調査風景（北東から）



DY1セクション状況（北東から）



DY7セクション状況（南東から）



KY1・KY2セクション状況（南方から）



DY3セクション状況（南方から）



6・7区調査風景（南方から）



調査風景（南東から）

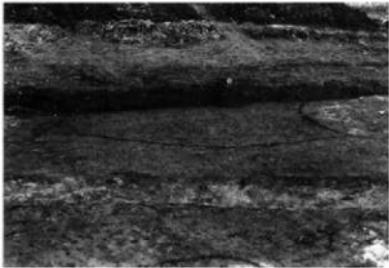


2区調査風景（南方から）



2区調査風景（南西から）

図版 4



KY1掘り下げ状況（東方から）



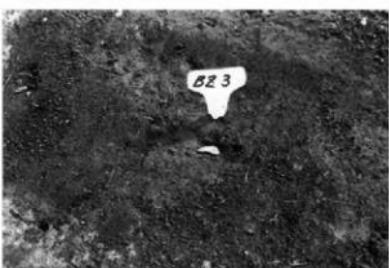
KY1・2プラン確認状況（東方から）



3区調査風景（南方から）



調査風景（南方から）



石器出土状況（南東から）



土偶出土状況（西南から）

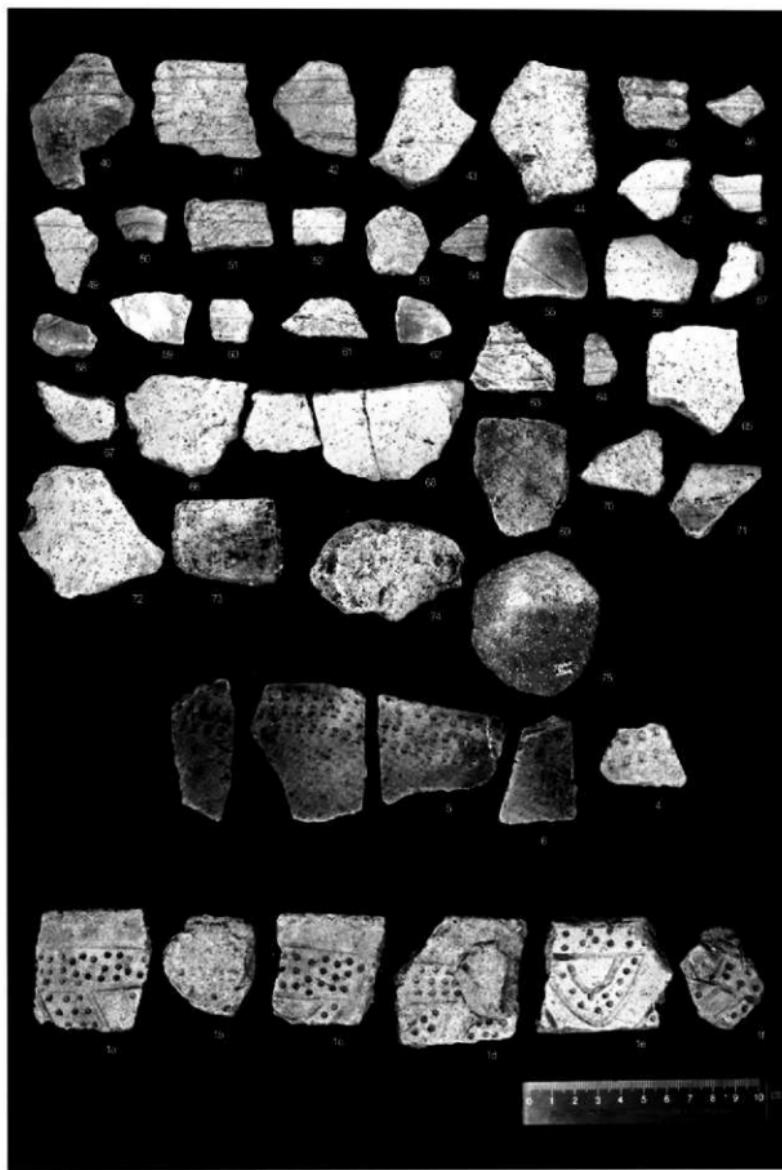


調査風景（南東から）

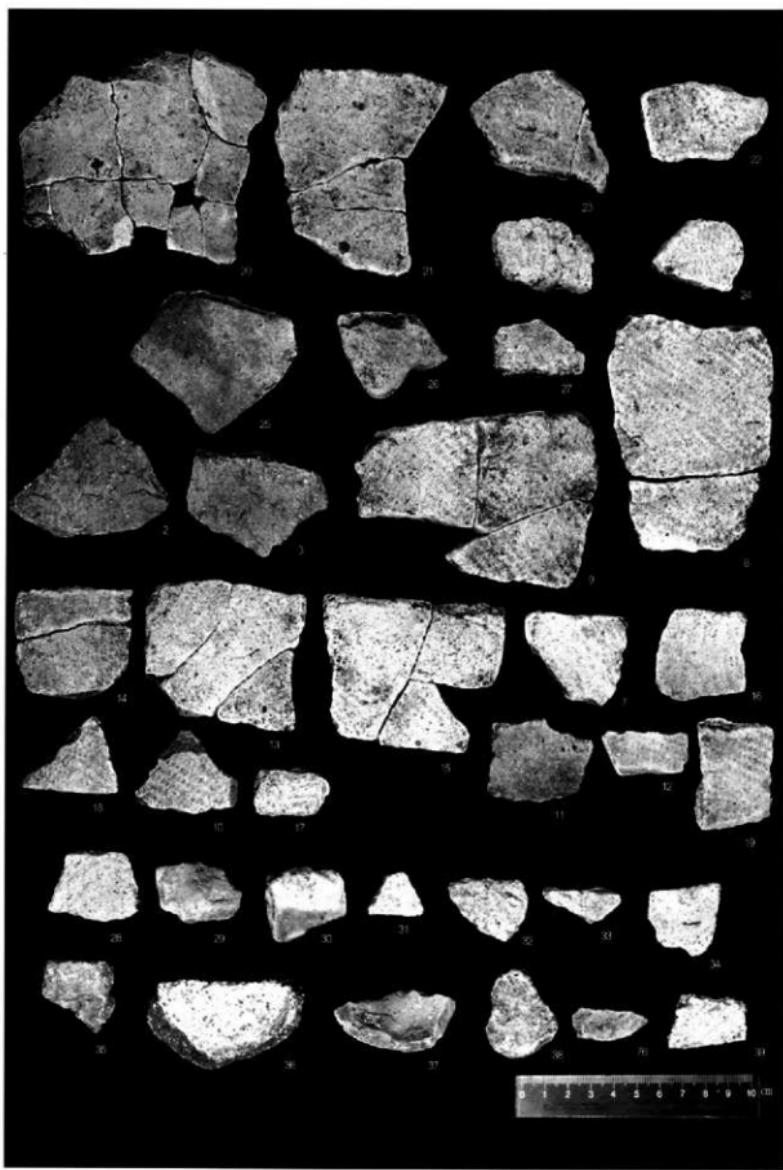


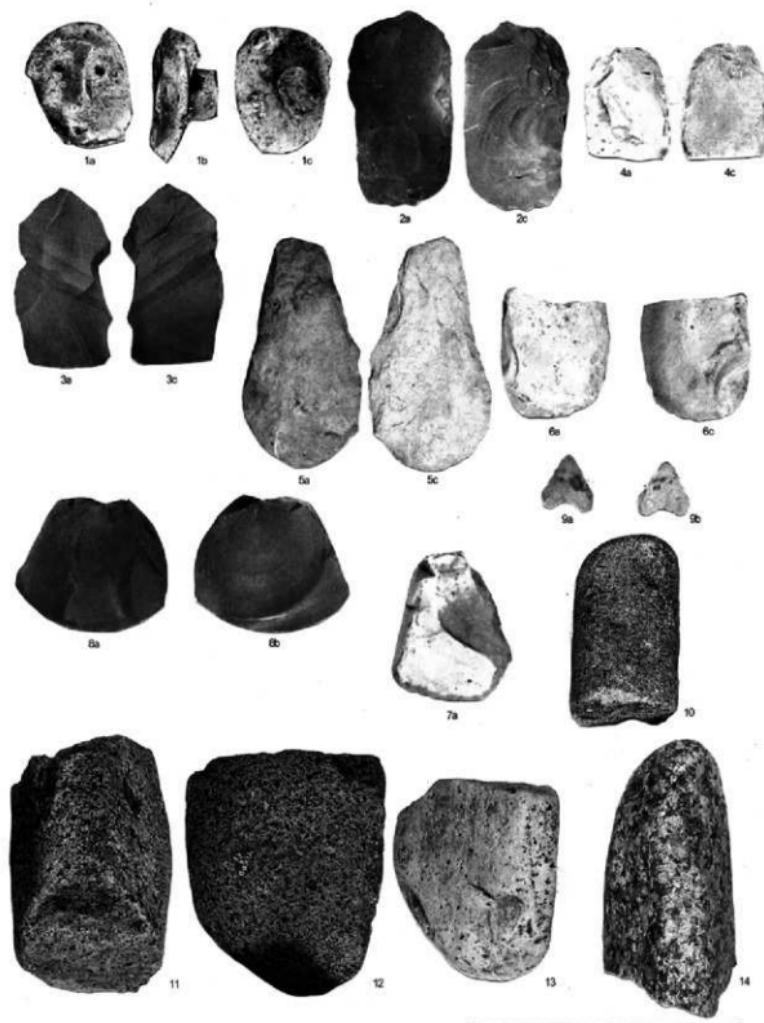
完掘風景（南方から）

圖版 5



圖版 6





0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 cm

米沢市埋蔵文化財調査報告書第63集

上谷地D遺跡発掘調査報告書

平成11年3月25日 印刷

平成11年3月30日 発行

発行 米沢市教育委員会

米沢市金池二丁目1-55

TEL (0238) 22-5111(内線7504)

印刷 株式会社川島印刷

米沢市大字花沢221-2

TEL (0238) 21-5511㈹